

ライフスタイルとスポーツ

日高哲朗

千葉大学教養部

はじめに

スポーツが新聞紙上で取り上げられる時、多くは競技型スポーツにまつわる話題であり、オリンピックに代表されるように高度化したスポーツの記事であり、一般市民スポーツが紙面を飾ることはあまりない。高度化スポーツはシビアな競争とコマーシャルイズムの浸透に揺り動かされており、社会的な題材としても話題性に事欠かないが、一般市民スポーツが人々の注目を引く題材となり、様々な観点から取り上げられ論じられることはまだまだ数少ないと言わなければならない。高度化スポーツについては筆者自身もアマチュアリズムとの関連でテーマにしたことがあるが、本稿では、現代スポーツのもう一つの側面である大衆化したスポーツ、即ち市民スポーツに焦点を当て、ライフスタイルとの関連を述べてみようと思う。

1. スポーツ人口の実際

さてどれほどの人がスポーツに親しんでいるかを知ろうとする場合、その一つの資料となるのはスポーツ組織人口である。表1.⁽¹⁾に示されるように組織人口は緩やかではあるが年々増えていることがわかる。しかし、これはあくまでも日本体育協会に登録されている加盟団体41(スポーツ芸術協会は含めない)のスポーツ人口を示しているに過ぎず、日本体育協会に加盟していない大きな組織人口を持つ硬式野球、ゴルフ、ゲートボールなどの競技団体のスポーツ人口は加えられていないことに留意する必要がある。

こうしたスポーツ組織人口の伸びから類推して、登録されない未組織の一般スポーツ愛好者は組織人口を遙かに上回る筈であり、これら二つを合計した総スポーツ人口は多大の数に上ることはまず

間違いない。例えば、青梅マラソンはコミュニティづくりの一環として昭和42年に第一回大会が開催されたが、その時の参加者は僅かに337人に過ぎなかった。しかしその後ジョギングブームも反映して年々多数の市民ランナーが参加するようになって参加者の数が膨大になったため、14回大会からはその数を15,000人に制限せざるを得なくなったほどである。現在全国で開催されるランニング大会は年間約300にもものぼり、その殆どで一般市民ランナーの参加が認められており、スポーツ人口の一端を窺い知ることができる。

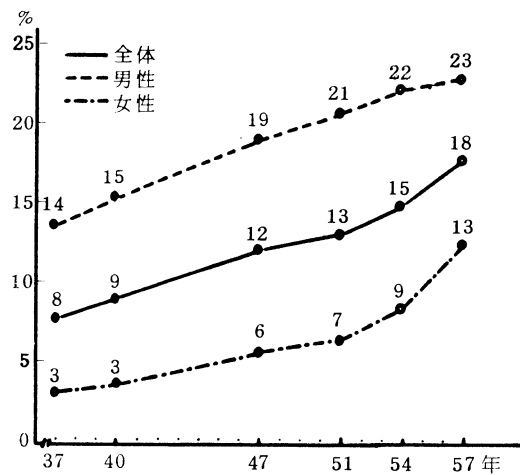


図1. 運動やスポーツのクラブ・同好会への加入状況

一方、これら自ら行う「するスポーツ」に加え「観るスポーツ」は、プロ野球に代表されるように、人々の生活のなかの重要な娯楽となっている。実際に球場に足を運ぶだけでなく、居ながらにして茶の間でテレビ観戦し、朝夕の通勤電車のなかではスポーツ新聞を広げ、ひいきのチームの勝敗を日常の挨拶代わりにするというように、観るスポーツは様々な形で人々の生活の中に浸透してきている。ちなみに1984年に実施された有権者3,000

人を対象に全国 250 地点で行われた読売新聞の調査によると、プロ野球に興味を持っているものの割合は50パーセントをこえ、有権者だけで5,000万人、これに19才以下を加えるとプロ野球に興味を持っている人の数は 6,000 万人は下らないと予想されている。⁽²⁾ この数を単純にプロ野球ファンとすることは危険だが、兎にも角にもプロ野球が「観るスポーツ」の一つとして人々の生活のなかで定着していることを証明している。

プロスポーツは観客がいてはじめて存在できるわけで観客なしには考えられないが、アマチュアスポーツにしても同様に「観るスポーツ」として人々の関心と呼んでいる。熱狂的に迎えられる。年に一度のオリンピック、「春夏の甲子園」で親しまれている全国高校野球大会などはその一例だが、企業の後援による冠大会の開催数からもそのことは裏付けられる。⁽³⁾ スポーツイベントは「企業名」が冠げられることによって企業の格好の宣伝媒体になるが、それはとりもなおさずスポーツへの人々の関心を逆手にとったものであり、スポーツが多くの人々の関心と呼んでいることを証立している。

ところで、経済企画庁と労働省の「創造的な自由時間のための条件」(84.4月)と題する報告によると、休日、休暇が連続して永くとれるほど、旅行、スポーツ、娯楽など積極的な活動が増えることが指摘されている。またこれとは異なる調査ではあるが、将来自由時間が増えた場合の過ごし方の希望についてみると、32.1パーセントの人がスポーツ活動を挙げており、⁽⁴⁾ 今後さらに余暇時間が増大していくことが考えられるところから、スポーツ人口はますます増大していくことが予想される。

少し古い資料ではあるが、昭和45年と55年に行われた調査結果に基づいてその一年間に実施されたスポーツ活動を比較した時そこには大きな変化が見られたが、それはなにやら現在の海洋性スポーツ(スキューバダイビング、サーフィン、ヨット、

カヌー等)、空域性スポーツ(ハンググライダー、スカイダイビング、気球等)の普及定着を予期しており、⁽⁵⁾ 今後こうしたスポーツがさらに拡大発展して行くと思われる。

スポーツは「身体的技能を競う遊び」と定義されるように、本来「身体的技能を披露することを要求する」⁽⁶⁾ もので、そこから体力のある若者のものであったし、男性のもので捉えられてきたようである。しかし以前ではとても考えられなかった女性のフルマラソンが行われ、「マスターズ」と称される中高年者の世界大会が開催されるに及んで、スポーツのむしろそうした若者の、男性のものとする考え方はもはや通用しなくなった。実写、ママさんバレーの発展を追えば明らかだが、⁽⁷⁾ 長ても短くもなようにスポーツ組織人口の拡大は女性も男性に負うところが大きく、加えて60才以上のマザー・ランナーでは週3回以上の人が46パーセントにもなる。またスポーツにもようやく目が向くようになった。スポーツは性別、年齢に関係なく、そして氣取って行われるなら社会的地位、階級といったものに関係なく、種目も多くの人々に支持を得ていくと言うことができよう。

2. 余暇活動としてのスポーツ

スポーツが大衆化するためには、多くの人々の手に余暇が行き渡り、経済的な余裕が獲得される必要がある。戦後朝鮮戦争を契機にして日本の高度経済成長が促進され、それに伴って人々のあいだに時間的、経済的な余裕がもたらされた。労働から解放される余った時間としての余暇時間は、ただ体を休めるといった消極的な休息の時間から、「積極的な生活」、「主体的な生活」を送るための活動によってあがなわれなければならない時間として利用されるようになり、こうした背景のものにスポーツも余暇活動の一つとして行われるようになったのである。

「労働の世界」はいかなる社会の社会生活においても支配的位置を占めていると述べたのはP.

L.バーガーであったが、⁽⁸⁾しかし今や人々は労働を離れたところに生きがいを見出し始め、以前の労働倫理が一律に支配していた社会とは大きく隔っている。若者の暮らし方の意識の変遷をみて、⁽⁹⁾図2.に示されるように、「趣味にあった生活を送ること」が年々次第に増加する傾向にあり、

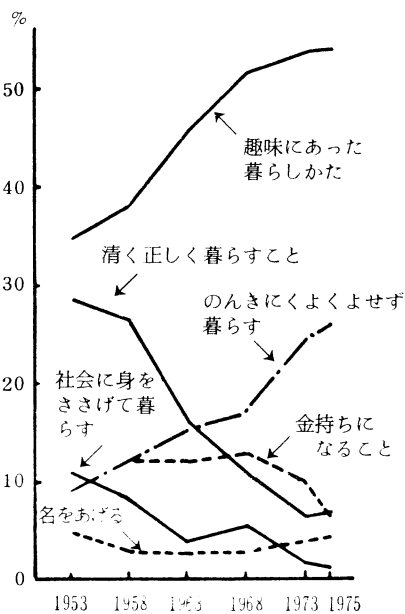


図2. 青年(20~24歳)の理想とする暮らしかた

別の調査結果ではあるが、仕事に生きがいを感じている人は4割弱で仕事以外の生活に生きがいを感じている人の2割弱を大幅に上回っているとは言え、何れをも両立させようとする人の割合が4割におよび、以前の「仕事一辺倒」は次第に陰をひそめてきている。⁽¹⁰⁾

現代の労働は大企業の工場労働にその顕著な特質を見出す事ができるが、それは極論して言えばライン工程に立つ労働である。そこでは職人的な個性的な技能は最低限に抑えられ、極度に合理化された動作を正確に繰り返し決められた時間の中で行うことが求められ、例えその人間がその工程に立てなくなったとしても、他の誰かと即座に代換可能で、その人の持つ特有の個性的な技能は

必ずしも必要とされない。むしろそうした個性的な技能を抑えたライン工程であったが故に同品質の大量生産が可能になったと言えるだろう。そこでは出来映えに対する個人の役割は極度に小さく短所も含めて個人のもつ能力のありのままを晒け出さなければならない労働とは著しく異なる。

近代人は共同体のしがらみから解放されることによって、「自分」(「個我」)に執着するようになったと言われるが、⁽¹¹⁾こうした労働環境の中で働く人々が、ありのままの「自分」を発揮できない労働の中に生きがいを見い出せなくなったと感じているとしても仕方あるまい。もはや労働のなかで自分らしさを表現することは、あるいは労働のなかに自分を投影することは、困難になったのである。いや、求めなくなったと言った方が正確かもしれない。

高度経済成長はテクノロジーの進歩・発展の力に与っていたが、その人間の幸福を増大してくれるものとひたすら信じられてきたテクノロジーの進歩が、実は様々な弊害を伴うことが次第に明らかになるに及んで人々の生活を脅かすテクノロジーの進歩発展に疑いの目が向けられ始め、それに対する反省が人々のあいだに露出してきた。そこから、よりよい生活とは何かが真剣に問われ始め、生活環境とか健康など身の回りの「生活」に係わる価値が人々の意識の組上に乗せられるようになったのである。ちょうどそれは高度経済成長が遂げられ、各家庭に耐久消費財(冷蔵庫、洗濯機、掃除機、テレビ、車、高級家具等)が行き渡り、豊かな生活が達成されたかに思えたその時であった。豊かな生活が豊富な物財に囲まれた生活から、その生活の「質」に求められるようになったのである。60年代から70年代への移行はまさに「量」から「質」への転換であったと言えるよう。

労働と余暇の関係から、

労働だけの時代

労働のための余暇の時代

労働と余暇が対等になる時代

労働が価値を失う時代

という4つの時代区分が考えられるが、⁽¹²⁾労働と余暇が対等になる時代へ移行するなかで、労働という生産優位の考え方が揺らぎ、人々は労働よりも労働以外の自分の生活価値を重視するようになり、そしてまた共同体の束縛を解かれた人々は個人の幸福の追求を価値あるものと認識するようになる。それまでは個人的な幸福を追求することは日陰の価値でしかなかったが、「個人の幸福」を追求することそれ自体が正当なものとなり、⁽¹³⁾日常生活の重心は労働から「私生活」に移った。それも豊富な時代に築かれた「私生活」中心主義であって、60年代以前の窮乏の時代から高度経済成長を経て、少なくとも衣、食、住の心配がなくなり、そうした基盤の上に立ってその生活の「質」が追求され始めるのである。

こうした脈絡の中でプライベートイゼーション（私生活中心主義）、クォリティオブライフ、ライフスタイルが声高に叫ばれるようになったのである。

ライフスタイルとは「生活の型」のことであり、「ある人の価値システム」を表現しているが、それは「財の消費」と「関わり合う人間」にまつわり、具体的には服装、身に付ける装身具、小物、家具等の消費財や、関係する人間、振舞い、言葉に現れる。⁽¹⁴⁾それらは個々バラバラに存在しているのではなく一つのシリーズを形成していると考えた方がよい。黒塗りの大型車に乗り、ダークグレーのスーツに身を包んだ人がどんな会話を交わすかを聞けば、それだけでおよその人となりか予想できる筈である。

とは言っても、一億総中流という時代において、物財の充足は平均的になり、個性的な生活を演出してみようとしても、それほど他人と異なる個性的な特別な何かができるわけではない。経済的には殆ど皆肩を並べているわけで、耐久消費財にしてもまず殆どの家庭に取り揃えられており、その中で個性を發揮しようとするれば、ちょっとしたところで自分らしさの演出を行わざるを得ない。と

すれば、この様な状況の中で余暇をどのように使うかというその使い方自体が自分らしさを表現する重要な媒体になってくると言わざるを得ない。

3. ライフスタイルとスポーツ

こうしたなかで、意識しようとしまいと、スポーツもその人なりのライフスタイルを構成する重要な余暇活動の一つに組み込まれる。

スポーツもその人の生活様式を示すシンボルとなり、一連の消費財と同様に豊かな生活を表示する「標準パッケージ」の一つを形成するようになったのである。行うスポーツが「らしさ」を表すのである。

ボードリアルは、「消費される物になるためには、物は記号にならなくてはならない」と述べた。⁽¹⁵⁾商品の持つ「物的価値」、即ち品質や機能や性能といった物本来の持つ価値よりも、「交換価値」、即ちデザインとか色、ブランド、あるいは広告などによって作られる価値が、消費者の選択の対象になるというのである。

同じことがスポーツにも当てはまるのではないが。前述したようにスポーツは、「身体的技能を使った遊び」と定義されるが、スポーツが今日のように普及定着したのはそれ故ばかりではない。スポーツの本質的特徴（「物的価値」）よりも、それぞれのスポーツが持つイメージ、それによってかもしだされるイメージ、感性的なイメージ：記号的価値（「交換価値」）によってスポーツが選択されるのである。

スポーツは個性的なライフスタイルを演出する記号となったのである。「⁽¹⁶⁾有閑階級の理論」のなかでベブレンが示唆しているようにテニスコートを持つことは、上流階級を示す記号になるのである。テニスコートの維持管理には多大の費用を要し、そのことが富の象徴となり上流階級を示す記号となるからである。

こうしたことは今日の大衆化の一翼を担っている女性スポーツのなかに顕著な例を見い出せるの

ではないだろうか。

ママさんバレーの今日の隆盛は、1964年の東京オリンピックの開催を契機に各市町村にバレーボールが配られたことに由来しているが、今日のように普及定着したのは電化製品によって家事労働が軽減され余暇時間が増大したこと、主婦も経済的な力をいくらか持てるようになったこと、そしてなにより主婦が家庭の外に出て何かの活動に従事することをむしろ価値あるものと考えようになったことが背景にあった。

主婦労働にとって3種の神器と言われた洗濯機、掃除機、冷蔵庫が各家庭に普及し、そして農村型生活から都市型生活へ移行するにつれ、住居費、交通費、教育費などが生活していく上でどうしても必要な社会的必要経費となり、加えて豊かな生活を送るために必要な経費（耐久消費財の購入、教養娯楽費等）が家計を圧迫した結果、主婦もパートタイム労働者として家庭の外に出て賃労働化しなければならなくなった。⁽¹⁷⁾

家計を支える第二の労働力として賃労働化した主婦達は家庭を離れることに成功したが、その結果経済的にも大きな力を持ち始め、女性の社会進出が主張され、主婦の座に安住してはいけな、社会に遅れてはいけなとする考え方が主婦に迫り、⁽¹⁷⁾ 家庭の外に出て何かの活動に身を置くことが促進されたのである。

ママさんバレーは、主婦に新しい風を吹き込み、それまで閉じ込められていた家庭生活を忘れさせ、幾何かの解放感と充実感を味あわせてくれた筈である。ママさんバレーは、家庭の外に出て活動する新しい主婦のイメージを表わし、バレーボールに興じることが自発的に家庭の外に出て社会的活動に参加する欲求を満たしてくれたと言えるのではないだろうか。

ママさんバレーによって水路づけられた女性スポーツは今日テニス、ジョギング、ジャズダンス、エアロビクスへと拡大してきている。

スポーツが一般の女性の間にも普及してきた一因

は男性の側の偏見であるとされる「女性らしさ」を覆すことになったからであろう。労働を離れた所で「活動的なこと、活発なこと」は、以前は女性らしさの徴表とは考えられなかったが、そうした過去の男性の偏見によって生み出されたとされる「女性らしさ」を打ち破ることが新しい女性像にオーバーラップされ、女性がスポーツのような社会的な活発な活動に打ち込むことが少しも非難されることはなくなったのである。スポーツが女性の社会進出を印象づける媒体として記号として利用されたのである。

昨今女性のあいだで特にブームとなったのは、ジョギング、ジャズダンス、エアロビクスなどであるが、これらはいずれも特定の技術・技能を身につけないと参加できないというのではなく、その人なりに体を動かせばよく、絶え間なく体を動かすことによって大量の酸素摂取を行うことを特徴としている。もともとは成人病予防のために奨励推進されたもので、健康づくりのためのものである。女性に限らず多くの人々を巻き込んだこのエクササイズブームは、健康づくりと深い関係があったのである。前述したように、スポーツは「身体的技能を披露すること」を要求することから、「体を使うこと」はどうしても外せないスポーツの重要な構成要素であり、そこから体を動かさなければならないスポーツが運動不足と関連づけられる。生命の土台である健康を維持する為にスポーツが行われるというわけである。実際にやってみると意外にハードではあるが、特に大筋運動が必要というわけでもなく、特別に難しい動きが要求されるというわけでもないこうしたスポーツは、成人病の予防としてまた現代人に不足している発汗の喜びを大いに満足させている。

しかしそれにもまして何よりも重要な誘因となったのはシェイプアップという女性の現実的願望を満足させてくれることであり、そしてまた自分の個性に適った好みの服装に身を包むことができることにある。ジョギングパンツにヘッドバンド、

レオタードにレッグウォーマーといったカラフルな服装が女性の心を擱んだのである。

スポーツがはたして人間の生理的・必要を満たす為に作り出されたものであるかどうかは議論のあるところだが、少なくともこうしたエクササイズはアメリカで成人病の予防を目的として医学的な見地から奨励されてきたものである。しかし、現実には日本でこのように盛んになったのはそうした人体の健康ゆえばかりではない。むしろこうした生理的「必要」という側面が破棄されたところに人々の注目が集まるのである。本来持っている「使用価値」によって道具として用いられるのではなく、豊かで快適な生活を送るための要素として他人との差異を表示するために利用されるのである。

大衆に行き渡ったスポーツではおそらくその最初がテニスであっただろうし、こうしたエクササイズなのである。若者に人気のあるサーフィン、あるいはハンググライダーといったスポーツも同じ脈絡のなかで扱えられる。

生産優位の社会では無駄なもの機能的でないものは否定される傾向にあるが、たとえ無駄なものであってもその人の欲求を満足してくれるものであればそれで十分なのである。マズローは欲求の5段階説を提唱し、人は 1) 生理的欲求、2) 安全の欲求、3) 所属と愛の欲求、4) 社会的承認の欲求、5) 自己実現の欲求を順次満たしていくものだと述べたが、衣食住に心配がなくなると、人は自己実現へと向かう。自己実現とは、自分がなりたいものになることだと言い替えてもよい。人々は生理学的・生物学的に生きる、つまり生存するだけでは満足せず、自分がなりたいものに少しでも近づきたい。そのささやかな欲望をいくらかでも満足させてくれるのは、もはや労働の世界においてではなく、他ならぬ自分の私生活の中の余暇の中に於てであり、スポーツもその一つに数えられるのである。私生活の充実のほうが生きていく上で重要な目標となり、スポーツもその一

つの対象に位置づけられたと結論づけることができるのではないだろうか。

ま と め

経済の高度成長は所得水準の向上と労働時間の短縮を実現し、そこから余暇を如何に使うかという問題を引き起こし、加えて労働価値から生活価値への転換は、私生活中心主義、クォリティオブライフ、ライフスタイルを人々に呼び起こし、「私生活」の充実を認識させると同時に、「私生活」を自分の思いのままに演出したいと願う。スポーツは、慣性的なライフスタイルに適合した、生活水準の上昇を具体的に示す一連の財とサービスの一つとして捉えられ、人々の生活のなかに定着してきたと言えるだろう。

ここではスポーツが本来有していると思われていた「価値」は見違えられ、それよりもそのスポーツが持つイメージ、さもしだすイメージ（「記号的価値」）が自分のライフスタイルの構成要素の一つとして位置づけられるのである。

そこから生まれる「専断性スポーツ」、あるいは「領域性スポーツ」が普及することが予想され、これまでにない新しいスポーツが流行し人々の生活の中に採り入れられるとともに、スポーツを行う環境の整備充実が計られることによって、慣性的な個々のライフスタイルに応じたスポーツが多くの人々の生活の一部となっていくことだろう。例えそれが見せかけの作られた欲望に支配されるとしても。

注

- 1) 池田 勝「スポーツ人口の動向」（「体育の科学」vol 34-10）p.730より転載
- 2) 1984年3月31日 読売新聞夕刊
- 3) 博報堂の調査によると、今年（昭和61年）予定されている「冠大会」は、約170大会ほどで、調査にもれた大会もあることから全体で210～250大会に上ると推察している。朝日

- 新聞86.6.朝刊。
- 4) 余暇開発センター編「レジャー白書85」
p.17
- 5) 斉藤精一郎・松田義幸著「日本人の余暇マーケット」日本経済新聞社 1974 p.93~94
- 6) Loy, J.W. "Sport and Social System"
Addison Wesley 1978. p.21
- 7) ママさんバレーの全国大会は1970年に第1回大会が開催されたが、その後の10年間の参加チームを年次毎に追うと以下ようになる。
(上段は年次、下段は参加チーム数)
- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| '70 | '71 | '72 | '73 | '74 |
| 855 | 1523 | 2698 | 3229 | 3371 |
| '75 | '76 | '77 | '78 | '79 |
| 3975 | 4481 | 4958 | 5144 | 5230 |
- 8) P.L. バーガー著「故郷喪失者たち」新曜社 1977年 p.126
- 9) 寿里 茂編「文化の変動」朝倉書店 1980年 p.116より転載
- 10) NHK世論調査所編「日本人の職業観」
1979年 p.80
- | | | | |
|----------------|-----|-----|-----|
| | 42年 | 49年 | 53年 |
| 仕事のほうに生きがい | 54 | 46 | 37 |
| どちらにも同じくらい生きがい | 32 | 35 | 39 |
| 仕事以外のほうに生きがい | 10 | 14 | 18 |
- (単位は%)
- 11) 真木悠介著「時間の比較社会学」 岩波書店 1981年
- 12) 荻原 勝著「日本人のクオリティオブライフ」至誠堂 1978年 p.83
- 13) 昨田啓一著「価値の社会学」 岩波書店 1972年 p.284
- 14) 渡辺 潤著「ライフスタイルの社会学」『青年心理』 1985年7月号 p.16~19
- 15) J.ボードリアール著 宇波 彰訳「物の体系」法政大学出版局 1980年
- 16) T.ベブレン著 小原敬士訳「有閑階級の理論」 岩波書店 1961年
- 17) 講座今日の日本資本主義編集委員会編「日本資本主義と国民生活」 大月書店 1982年 p.10~16
詳しくは第二部第一章、第二章を参照。
- 18) 寿里 茂編「文化の変動」 朝倉書店 1980年 p.106
(昭和61年9月2日受付)
- 19) A.H.マズロー著 小口忠彦監訳「人間性の心理学」 産業能率大学出版部 1971年

—— 主要参考文献 ——

- J.ボードリアール著 今村仁司他訳「消費生活の神話と構造」 紀国屋書店 1979年
- 小沢雅子著「新階層消費の時代」
日本経済新聞社 1985年
- 寿里 茂著「文化の変動」 朝倉書店 1980年